ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第343回

金の輝きと能―能面と能装束にみる金のイメージ―

光輝く金は、洋の東西そして時代を問わず、その希少性と美しさ、豪華さから、富や権力、聖性あるいはめでたさの象徴として珍重され、さまざまな品に用いられてきました。日本においても、彫刻や絵画、工芸はもちろん建築などにも使用され、それぞれに多様な役割やイメージが託されています。その一例として、能面や能装束における金について紹介しましょう。

そもそも能は、面と装束を用いる歌舞劇です。百四十ほどある主要な演目の主役の多くは、この世ならざる存在、つまり神や精霊、人間の霊、鬼などで、この主役が、老松を描いた鏡板を背景とする簡素な舞台において、余分なものを削ぎ落とした洗練された所作で物語を演じます。

このような特徴を持つ能において、面は役者が人間とは異なる存在に変身するための道具、装束は舞台に華やかさを演出する衣裳であると同時に、役柄や身分、性質、心情などを表現する重要な要素でもあります。そして、金が使用されているかどうか、またどのように用いられているかが、役柄と密接に関わっています。

能面の場合、金は人ならざる存在の象徴です。目や歯に鍍金された金属板を嵌めていれば、その面は人ではなく、神霊や鬼などの人智を超えた存在、金泥を点していれば幽霊や怨霊であることを表現します。

例えば写真①は、文殊菩薩の眷属である霊獣の獅子を表した面です。金具を嵌めた金色の目と牙のある歯は、人ではない存在であることを示し、さらに面全体に塗られた金泥が、一層、超人的な印象を強めています。

写真① 獅子口 甫閑満猶作（当館蔵）

前方を睨み付けてカッと口を開いた、気迫に満ちた表情です。

一方、金を用いた装束は、役柄の威厳や力強さ、品位の高さを表現します。男性の主役の場合、神や鬼神といった重々しい役には、龍や稲妻、亀甲などの大ぶりで力強い文様を金で表した装束、公家の霊のような優美な役には、透け感のある絽や紗に金で菱や草木、霞などを細やかに表した装束と、役柄のイメージにふさわしいものが用いられます。

中でもとりわけ豪華な装束が、金糸を全体に織り込んだ金地の唐織（写真②）です。唐織は主に女性の役で使用する、能装束を代表する華麗な装束です。写真の唐織は、光輝く金地の上に、さまざまな色糸で牡丹と椿の花を納めた団扇形と桐、七宝文を散らした重厚なもの。このような金地の唐織は特に格が高いとされ、普賢菩薩の化身である江口遊女の霊のような、特に品位が高い役でなければ用いることができません。

このように、能面や能装束の金は、人ならざる存在の人智を超えた力や威厳、気品を象徴し、物語の表現に奥行きを加える役割を担っています。ごくシンプルな能舞台の空間において、金色に輝く面や装束は観る者の目を惹きつけ、神や霊が織りなす物語の世界へと誘うのです。

写真② 金地団扇形と桐と七宝散らし文様唐織（当館蔵）

【彦根城博物館学芸員　茨木恵美】

写真の作品は、テーマ展「金のきらめき―輝きの日本美術―」で10月2日(水)～11月4日(月・休)の期間、展示します（期間中無休）。